

## 第1回「家畜排せつ物の利用促進のための意見交換会」議事要旨

1 日 時 平成18年6月28日（水） 13：30～16：00

2 場 所 農林水産省飯野ビル第1会議室

3 出席者 委 員：別紙のとおり

事務局：町田畜産部長、清家畜産企画課長、姫田畜産振興課長他

4 議事概要：

委員の互選により、羽賀委員を座長に決定。座長の指名により富士委員を座長代理に決定。事務局から「畜産環境をめぐる情勢」について説明。その後意見交換。

### 【猪股委員】

- ・ 耕種農家と畜産農家との交流がないことが、耕畜の連携が取りにくい背景となっている面もあり、第三者の市町村などが両者の話し合いの場を作ることが必要。
- ・ 特別栽培による農産物を学校給食で積極的に供給することが、地域のたい肥利用拡大につながる。そのためには、行政の関与が必要。
- ・ たい肥の品質の問題については、作物の特性に合わせたたい肥化を推進することが必要。

### 【小原委員】

- ・ 全農としてJAたい肥センターの耕畜連携の取組、具体的には耕種農家の労力軽減の観点からの散布サービスや、従来の施肥とたい肥の施用した場合を比較する実験圃場の取組を促進している。
- ・ 悪臭問題でご苦労され、廃業した畜産農家もあると思う。畜産経営の悪臭を根本から減らす対策や努力などはこれからも重要。

### 【加藤委員】

- ・ 普及組織は耕畜連携の地域での推進役を担っている。
- ・ 耕種農家も環境に配慮し、土づくりをきちんとしていきたいという農家も増えてきている。たい肥需給のミスマッチを解消するための業務に現在取り組んでいるところ。
- ・ 連作障害防止等のため、耕種と畜産の交換耕作に取り組んでいるところや、耕畜農家で麦ワラや稲ワラとたい肥の交換など行っている所もある。
- ・ 試験研究も進めているが、たい肥化については特効薬は無く、水分調整と切り返しを頻繁に行うという基本的なことが重要だが、労力の問題からなかなか難しい。

#### 【須藤委員】

- ・地域の酪農家で、資金を投入して大きなたい肥化施設を作った農家もあるが、供給過剰でたい肥の値段が下り、必ずしも採算が取れるものでもない。自分のところは、たい肥は自家草地に還元しているが、共同でたい肥舎を整備したところにあっては、牛舎から離れたところにたい肥舎があるため、運搬などにも労力を必要とするところもある。
- ・また、悪臭を減らす努力をしている農家がある一方で、悪臭を放置している農家があることも事実。資料にある課題の解決が、まさに現在の状況の解決にいたるものではないか。
- ・酪農教育ファームを10年しているが、牧場というのは生き物を飼育しているので、多少の臭いがあることは、消費者に理解してもらうことも必要だと思う。
- ・酪農家や養豚家などは、牛乳生産や肉生産が目的なので、たい肥生産に手が回らないこともある。特に家族経営は、努力はしていても労働力の関係から、なかなかたい肥まで手が回らないのが現状。

#### 【徳地委員】

- ・畜産農家からたい肥を収集し、耕種農家への散布を行っている。耕種農家に使ってもらうためには、たい肥散布のサービスが重要。
- ・耕種農家側として求めるたい肥は、様々である。施肥効果をねらうもの、土壌改良材として効果をねらうものと、用途をはっきりさせる必要があるのではないか。

#### 【羽賀座長】

- ・耕種も畜産もたい肥とはこういうものという固定概念がお互いにあるので、それを取り除き理解しあう必要がある。

#### 【富士委員】

- ・たい肥センターの経営状態についても検討する必要があるのではないか。
- ・耕種農家の使いやすさという観点から、たい肥の施肥基準の情報提供の普及が必要ではないか。
- ・利用の基本方向として、農地還元、焼却、隣県との協力による広域流通、エネルギー利用の位置づけを検討する必要があるのではないか。
- ・環境保全型農業の支援を進める中で、化学肥料を半分にした場合の係増し経費を支援すべきではないか。

#### 【堀江委員】

- ・耕種農家にたい肥を使ってもらうためには、使いやすさ、質が課題。さらに成分表示を行うなどの努力をすれば、使ってもらいやすくなる。
- ・液肥については、運搬や保管場所の問題などもあって、使ってもらいにくいので、

今後の課題でもある。

- ・私たちは養豚の生産者団体で、独自のチェックオフ制度をとって活動しており、今年にはビデオを作成する予定。豚舎は衛生関係から中に入ってもらえない所が多いので、農家の中を撮影したビデオを作り、消費者の養豚への理解を広げたい。
- ・学校給食についても、地元産食材を利用してもらっている。子供への教育とともに、親にも畜産を理解して貰う必要がある。
- ・エコフィードの利用促進も行っているところ。大手コンビニや食品産業事業者等と協力し、食品残渣としてエコフィードを出したところに、豚肉を出荷するというサイクルの構築も取り組んでいる。

#### 【増田委員】

- ・ホームセンターでたい肥が高く売られている中で、資料にある「たい肥が安くてたい肥センターの経営が厳しい」といったことは実感が伴わない。
- ・耕畜連携が上手くいっていない原因としては、たい肥の成分が不安定などの問題が、大きいと思う。
- ・耕種農家は、そのまま使用できるたい肥が欲しいし、そもそもの意識が違うのではないか。使ってもらうためには、畜産側がまず努力をしないとイケないのではないか。
- ・都会の人は、畜産、ましてや排せつ物など遠い存在だと思っている。酪農教育ファームというのは、消費者にそういうことを知ってもらうととてもいい機会だと思う。

#### 【森（忠）委員】

- ・管理基準対象農家の99.9%が管理基準に適合しているとあるが、施設を設置した率が99.9%であって、日常の運転管理がきちんと行われている率はもっと低いのではないか。
- ・南九州で炭化肥料を中国向けに輸出したが、検疫等で時間がかかり、実際には難しい。
- ・飼料成分を工夫することで、ふん尿の窒素分を減らす実験も行っており、今後もそういう研究を進めることも重要。
- ・畜産環境アドバイザーによる管理技術の普及なども、悪臭対策には有効である。

#### 【森（雅）委員】

- ・飼料を輸入しているということは窒素を輸入しているのであって、更に化学肥料まで使う中で、本当に窒素が過剰でないといえるのか。生態系を視野に入れた議論も必要ではないか。
- ・家畜排せつ物たい肥利用促進の特効薬は、たい肥を利用して生産した作物を、消費者が高く買ってくれること。
- ・食品リサイクル法の施行により、食品残渣たい肥についても利用が促進されているが、ホテルなどから出る食品残渣たい肥は、非常にきれいで利用しやすいし、臭い

もない。畜産農家も見習うべきではないか。

- 耕種農家は、人の口に入るものを作っているのだから、いい加減なたい肥では困る。たい肥を出す畜産農家側の責任は大きい。
- 日本は窒素分を食料で輸入しているので、筋から言えば、たい肥を輸出すべきという考え方も成り立つ。

※ 次回は、8月下旬頃を予定。開催日については改めてお知らせすることとした。

以上

(別紙)

第1回「家畜排せつ物の利用促進のための意見交換会」委員出席者

(敬称略、五十音順)

猪股 敏郎	(社) 日本土壌協会専務理事
小原 良教	全国農業協同組合連合会畜産総合対策部長
加藤 和彦	北海道農政部技術普及課長
須藤 陽子	農業経営 (酪農)
徳地 好雄	農業経営 (水稻、畑作、施設園芸)
羽賀 清典	(独) 畜産草地研究所研究管理監
富士 重夫	全国農業協同組合中央会基本農政対策部長
堀江 光洋	農業経営 (養豚)
増田 淳子	ジャーナリスト
森 忠明	(株) モリプラント代表取締役
森 雅美	農業経営 (水稻、畑作)